実りある人生を「家族の会」とともに

●●1（全12回）●●

「家族の会」とともに、理念に掲げる“実りある人生”を送って来られた方たちがおられます。６名の方に、触れる機会の少なかった「家族の会」とのかかわりの原点、その中で得たもの、また、今後の「家族の会」の進むべき道、望むことなどを、一年間にわたり綴っていただきます。

“実りある人生”を終生のテーマに

認知症の人と家族の会　顧問　中村　重信

第１回（全２回）

「実りある老後を！」日米検討会のこと

「実りある老後を！（promise of productive aging）」という日米の検討会が1987年４月ワシントンの国会議事堂（Capitol）で開かれました。呼びかけ人はアメリカの国立老化研究所所長、ロバート・N・バトラー先生でした。日本とアメリカから数名の老年学の専門家や政策立案者が集まって、何とアメリカの国会議事堂で講演会が開かれました。

白いハナミズキの美しいワシントンの街の一画から、水爆攻撃を想定して設置された秘密の地下鉄で国会議事堂に導かれました。ワシントンやリンカーンなどの大きな銅像を見ながら入った委員会室にケネディー元大統領の弟テッド・ケネディーや第二次世界大戦の二世部隊に参加したダニエル井上上院議員など数十名の人達が集まっておられました。その中には当時の大統領ロナルド・レーガンの夫人ナンシー・レーガンさんも参加されていました。

私は「実りある老後―生物学的・社会学的アプローチ」と題した講演を30分間しました。老化と病気の違いや老化が認知症に変わる機序などの生物学的な側面を分かりやすく話しました。とくに、当時開発され始めた脳の中のアセチルコリンを増やす認知症の治療法も紹介しました。また、社会的側面として、日本の「家族の会」の活動や義理の母が好きだった能の写真を写して、「実りある人生」を達成する一つの方法になるかもしれないと申しました。

「家族の会」は実りある人生をかなえるための非常に有効な手段だと思うとの意見がアメリカ側からも寄せられました。ただ、家族制度が当時の日米では異なるので、なかなか難しいというコメントもありました。私の示した仕舞（しまい）※の写真は大好評で、高齢者の心身を健康に保って実りある老後を達成できそう

第１回日英認知症会議

東京にて開催

３月15日、東京にて「日経・フィナンシャルタイムズ共同プロジェクト第１回日英認知症会議」が開かれました。国内外の認知症に関わる多分野の専門家70名が講演を行い、最新情報の交換や議論が行われました。「家族の会」からは鈴木代表が、損保ホールディング協賛による「認知症に関する社会的課題の解決に向けて」という分科会で、「家族の会」の歴史と活動について報告しました。また、杉山孝博副代表は、「社会にもっと知って欲しい当事者の声、エピソード」というセッションで、佐保輝之・ひかる夫妻の事件についても触れて、認知症の正しい理解が必要なことを述べました。会議全体を通し、PPP（Public Private Partnership公民の協力関係）の必要性が強調されていました。

会議の最後には、参加者全員で〈①すべての人が当事者意識を持つ社会②認知症の人が社会貢献できるシステムの創出③法制度の拡充④早期診断とその後のケアシステムの構築⑤リスク軽減と治療法の研究の推進⑥医療保健システムと社会経済支援制度の充実⑦世界的課題とし

で、アメリカでも試みてみたいとの声もありました。ただ、写真の義母は数年後にガンのため亡くなりました。

何故、このような会がアメリカの国会議事堂で開かれたか私にも不思議でした。その後間もなく、レーガン大統領がアルツハイマー病であることが公表されました。賢夫人の誉れ高いナンシー夫人が夫にアルツハイマー病の疑いがあると知って、高齢化の進んでいる日本では認知症に対してどんな対処をしているかを教えて欲しくなり、この会が開かれたと思われます。

わたしの来し方

子供の頃から私は実りある人生に憧れていました。周りの多くの友達が野球の選手や映画のスターになりたがっていたのと違って妙に年寄じみていて、実りある生を享受されていた高齢の方を理想にしていました。その頃の目標を持ち続けて、医師の道を選び、老年医学や神経内科の門を叩き、認知症を専門分野として選びました。

その道を歩む過程で、様々の方々に出会い、お話を聞くことによって、貴重なことを学ぶことが出来ました。中でも「家族の会」との関わりはかけがえのない経験でした。1980年代の初め頃より、アルツハイマー病治療薬開発のための研究をしていた私に多数の支部で認知症の方や家族の方々のご苦労を聞く機会を与えて下さいました。

「家族の会」との関わりを深める

1990年に広島大学で働き始めて地域医療を

なかむら　しげのぶ
中村　重信

●プロフィール●

昭和38年　京都大学医学部卒業
昭和55年～平成２年　京都大学医学部助教授（神経内科）
平成２年～14年　広島大学医学部教授（内科学第三講座）
平成14年～29年　洛和会京都新薬開発支援センター所長
平成29年　第32回国際アルツハイマー病協会組織委員長
平成29年～　洛和会京都新薬開発支援センター顧問
平成14年～　広島大学名誉教授

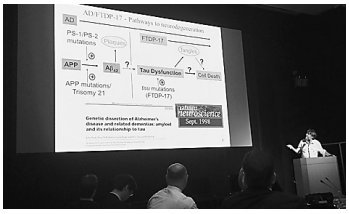
重要な課題として取り上げ、「家族の会」広島県支部と一緒に仕事をさせて頂く機会も増えて参りました。広島県内の様々の地区へ行って出前学習会をしました。その地で認知症の方や介護者さん達から実りある人生のお話を聞くことが楽しみでした。山間の地域では、車がないと日々の食べ物にも困るといった、都会では考えられない問題も知ることができました。

一人の人間が体験することには限りがありますが、他の人と関わりを持ち学ぶことによって、自分自身の人生がより豊かになるようです。とくに、認知症という思いがけない事態に遭遇して、認知症の人の体験やその人を介護する方との会話が自身の生きざまをより実りあるものにできることを知りました。

パラリンピックでは、メダル以上にその選手のたどったストーリーに感動します。認知症の人や家族も自分の存在を示して頂ければ、それを見聞した人に実りある人生を約束することでしょう。　（つづく）

※能の略式の演じ方の１つ。面・装束をつけず、紋服・袴のまま素で舞うこと。

ての取り組み⑧協働のためのデータの蓄積と共有〉の８項目を重点とする声明の草案[1]を作成しました。



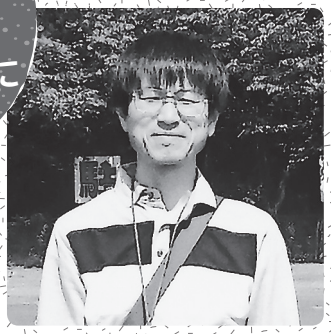
閉会にあたっては、加藤勝信厚生労働大臣が「世界で最も早く高齢化が進む日本が英国と連携して世界に発信し、認知症の方にやさしい地域づくりを推進したい」とあいさつしました。

この会議の前には、２日間にわたり第12回世界認知症審議会（World Dementia Council：WDC）[2]が開催され、会議後の16日には、英国大使館主催の日本英国認知症ケア研究セミナーが開かれ、日本と英国の認知症への取り組みが、連日にわたり東京で一堂に会しました。

1）草案をもとに確定された声明は下記に掲載。
http://ac.nikkeibp.co.jp/1stdem/tokyo2018/pdf/Japan-UK_Dementia_Conference_Statement.pdf

2）WDC：2013年にロンドンで開かれたG8認知症サミットを機に設立された非営利の国際組織。政府、NGO、産業界、学術研究機関、保健医療福祉の分野の有識者によって構成される。「認知症の人の生活の改善」と、「2025年を期限とする認知症の治療の実現」を目的として国際的ネットワークによって活動している。

本人登場
私らしく仲間とともに
No.151



及川（おいかわ）　昌秀（まさひで）さん
56歳・山形県支部

今月は「おれんじドア山形」について、３月号に続き、山形県支部の及川昌秀さんに紹介いただきます。「おれんじドア山形」のスタートのきっかけ、丹野智文さんや県の担当者、周りの方々への感謝の気持ちを奥様がまとめてくださいました。

（編集委員　松本律子）

宮城の「おれんじドア」と出会って…

宮城で丹野智文さんが開いている「おれんじドア」に平成28年10月に初めて参加し、最初ちょっと暗い顔でいた方も帰る時はみなさん笑顔になっているのを見て、「カフェって大切な存在」だと痛感し、「若年性アルツハイマーになっている私にも、役に立てることがあるんだ。ぜったいやりたい」と思いました。

「おれんじドア山形」をスタート

「でも、気持ちがあっても、時間は私と妻が休みの土曜日の午後と決めても、場所は？」と悩んでいると、県の後藤主査（当時）から「さくらんぼカフェで開いては？」との言葉をいただき、場所を借りて、丹野さんの「おれんじドア」のようなカフェを目標にと「おれんじドア山形」として平成29年６月からスタートしました。

支部会報に掲載された「おれんじドア山形」の案内

３月10日の「おれんじドア山形」で。及川夫妻（前列左から３、４人目）を囲む認知症のご本人と「おれんじドア山形」関係者

参加者の声が励みに

事前にチラシも作って配り、初日には５人の参加があり、緊張で何を言っていいのか言葉が出ず、話ができませんでしたが、現在も妻が進行係をしてくれているので助かります。

今まで「おれんじドア山形」を開いてきて、初日から毎回参加している人たちから、「楽しいので参加しています」「次回も楽しみにしています」と言っていただけるのが励みになります。

協力してくださったみなさんに感謝

カフェを開くことができているのも、チラシのちょこっとパクリを快く承諾してくださった心の広い丹野さん、場所を提供してくださった県の方々、カフェのために毎回準備していただいているみなさんのおかげです。本当にありがとうございます。一歩前へを合言葉に「おれんじドア山形」をやっていけることに感謝します。

情報コーナー　本人交流の場
（詳細は各支部まで）

宮城◉5月17日㈭10:30～15:00／翼のつどい→泉区南光台市民センター
山形◉5月19日㈯13:00～15:00／置賜のつどい・本人のつどい→すこやかセンター
埼玉◉5月23日㈬11:00～13:00／若年のつどい・大宮（北区）→諏訪の苑
●5月26日㈯11:00～14:30／若年のつどい・深谷→特養「フラワーヴィラ」
千葉◉5月27日㈰13:00～15:30／若年・本人のつどい→千葉県社会福祉センター
静岡◉5月8日㈫10:00～13:00／若年性のつどい→富士市フィランセ西館
愛知◉5月12日㈯13:30～16:00／若年認知症ご本人家族交流会「元気かい」→東海市しあわせ村
京都◉5月6日㈰13:30～15:30／若年のつどい→京都社会福祉会館
広島◉5月12日㈯11:00～15:30／陽溜まりの会広島→広島市中区地域福祉センター
愛媛◉5月25日㈮13:00～15:00／若年性つどい→愛媛県看護研修センター
熊本◉5月20日㈰11:00～15:00／「みどりの小路」若年本人交流会→ライフサポート須屋

会員さんからのお便り

このコーナーに寄せられたお便りの他、入会申込書、「会員の声」はがき、支部会報から選び掲載しています。

お便りお待ちしています！
〒602-8143 京都市上京区猪熊通丸太町下ル
仲之町519番地 京都社会福祉会館内
〈「家族の会」編集委員会宛〉
FAX.075-811-8188
Eメール office@alzheimer.or.jp

心に穴があいたよう

●兵庫県　Aさん　60歳代　女性

２年前に実母を見送りました。27年間二人きりの介護生活でした。91歳の母は、不自由な身体と頭で精いっぱい生きてくれたと思います。そして、いつかは終わる介護ですが、ひとり残されて心に穴があいたようです。自分の時間ができたので、行けなかった「つどい」に参加しましたが、介護を終えて残された者には、居場所のなさを感じてしまいました。認知症の家族を見送ったあとの気持ちを話せる場がほしいと思いました。そう思うのは私だけでしょうか。

介護離職の現実

●福島県　Bさん　40歳代　女性

母は７年前から症状が出てから、受診するまでに３年ほどかかりました。治療に繋げるまでが大変だったこと、また、進行に伴い、自宅での介護の難しさを実感しました。介護離職の現実も知りました。

これから先が心配

●神奈川県　Cさん　50歳代　男性

80歳代の母がアルツハイマー型認知症と診断されて半年後に父が他界。認知症の母が一人暮らしになりました。今は物忘れがあるくらいで、食事を作ったりでき、まだ軽い症状です。これから先のことが心配で、皆さんの話を参考にしたいと思い「家族の会」に入会します。

もっと学びたい

●大分県　Dさん　50歳代　女性

80歳代の父は、アルツハイマー型認知症と診断され、10年になります。父の姿から多くのことを学ぶことができました。自宅での介護で感じたことは、病気や症状だけでなく、環境にも左右されることでした。認知症の学習はしてきましたが、まだまだ不足していると思うので、もっと学びたいです。

ヒヤッとします

●千葉県　Eさん　70歳代　女性

２年前にアルツハイマー型認知症と診断された80歳代の夫を介護しています。次第に進行しているのですが、本人は今のところ、あまり認識しておらず、ヒヤッとしてしまうことがあります。お風呂や散歩など、自分ひとりでしたいらしいのです。

免許を返納しました

●三重県　Fさん　50歳代　女性

80歳代の父は、一昨年前に脳血管性認知症と診断されました。ずっと免許の返納を勧めていました。今年の１月にやっと警察から返納要請の連絡があり、ほぼ強制的に返納に至りました。その後返納したことを忘れて、返してもらうようにと、毎日私に電話する始末でした。主治医の先生からの説明やレントゲンの写真を撮って見てもらい、病気のことを毎日説明し、少し納得しているようです。

以前、本人は元気だから必要ないと言い張り、相談に来ていただいたケアマネジャーさんを追い払ってしまったので、現在、別のケアマネジャーさんに市役所からの健康チェックと言い、来ていただき相談しています。デイサービスに行けるようにしたいです。

本人の希望と家族の負担

●群馬県　Gさん　40歳代　女性

前橋での痛ましい事故、本当に心が痛みます。我が家でも、免許返納の説得はできず、家族が車のカギを取り上げる形になりました。本人の出かけたい希望は減ることはなく、しかし、バス等の利用は認知機能の低下で失敗続き…。「連れて行ってくれ」「その日は無理」というやりとりが繰り返される状況です。

悲しい事故は絶対に繰り返されてはならないという思いとともに、本人の希望と家族の負担。どうしたら上手く折り合いがつくのかと悩む日々でもあります。少しずつでも、車がなくても生活に困らないシステムを作っていかなくてはいけませんね。

介護家族の思いを理解

●鹿児島県　Hさん　50歳代　女性

これまで、ケアマネジャーの仕事を長くしてきました。認知症の方ともたくさん関わってきました。

今は、90歳代の義母を毎日介護しており、当事者や介護している家族の思いが一段と理解でき、新鮮な毎日です。

高齢認知症患者のためのホスピスを

●三重県　品川鎮郎さん　86歳

妻が誤嚥性肺炎で亡くなった。88歳だった。脳血管性認知症で要介護５と認定され、特養で暮らしていた。ところが昨年８月23日早朝、特養から「高熱と呼吸困難で医療センターに緊急入院させた」と連絡があり、急いで駆け付けた。誤嚥性肺炎とのことで１週間後にいったん恢復したので、ゼリー食を摂ると肺炎が再発した。その後病状は一進一退しながらも安定してきて、10月10日に退院を予定されたが、その日の早朝に容態が急変して死去したのだった。

医療センターで妻を看取りながら痛感したことがある。昼夜を分かたぬ看護師の皆さんの看護には頭の下がる思いだが、老いた病身の私は狭い病室で落ち着かず疲れた。末期癌患者の安らかな死のためのホスピスがあるように、死期を迎えた高齢の認知症患者にも、ホスピスが救急病院や特養に併設されていたら介護する家族の苦労も軽減されよう。妻が暮らしていた特養で今年度は25名の入居者が亡くなったが、その人たちも妻同様に救急病院で亡くなったのだろう。高齢化が進むにつれ、認知症患者の一層の増加が予測されるだけに、ホスピスを福祉政策の一環として進めることを政府に強く期待したい。

＊投稿者のご希望により、実名、実年齢を記載しました。

※お名前はイニシャルではありません。
年齢は「50歳代」等で表記しています。

高知県
支部

「オレンジカフェとさ」で奇術クラブのマジック

１月18日に開かれたオレンジカフェには寒い中、町内会長さんはじめ21名の参加がありました。

今回の催しは、「高知奇術クラブ」のマジックです。メンバーは30年来のベテランの方、学校の先生で退職後25年続けている方、また仕事の合間にボランティアをしている３名の男性の皆さんです。

それぞれ得意分野があり、まずトランプの見事な手さばきが披露されました。次に箱の中から１万円札の札束が出てきて、見物人を驚かせました。また紐や布、紙を使ったマジックでは、目の前で繰り広げられているにもかかわらず、種も仕掛けも分りません。

楽しい時間はあっと言う間に過ぎてしまいます。コーヒーを飲みポンカンを食べて今回のカフェは散会となりました。

全国の「家族の会」支部会報から活動を紹介!!

いきいき「家族の会」まちでもむらでも

編集委員／内田妙子

西濃地区の新年交流会

１月14日11時から14時、美濃味匠（ソフトピア１Ｆ）にて支部・西濃地区新年交流会が開催されました。

23名の参加者全員でのボウリング大会です。開始前から練習をする人もいました。ピンに見立てたペットボトルを狙って投げても、ゴムボールはピンには当たらずガターです。「数十年ぶりにボウリングをしました」と言いながら、いざ投げる時は皆さん本気です。寄付していただいた景品は、成績順に全員がいただきました。健康体操で体を動かした後には、おいしいお弁当が待っていて、皆さん大満足。

そして、年初めの初笑いは“落語”です。落語を趣味とされているグループからボランティアさんに登場していただきました。アンケートには「日頃を忘れ、久しぶりに笑うことができました」という感想が寄せられました。

岐阜県
支部